

5-2					
主題		認知症対応型デイにおいて高次脳機能障害の利用者を受け入れた一事例			
副題		利用者のストレスポイントを分析、明確化し、より良い対応方法を考える			
キーワード 1	高次脳機能障害	キーワード 2	認知症対応型デイ	研究(実践)期間	12ヶ月

法人名・事業所名	社福) 日本フレンズ奉仕団 デイ・ホーム中丸
発表者(職種)	大野範子(生活相談員)
共同研究(実践)者	なし

電 話	03-5486-7400	F A X	03-5486-6700
-----	--------------	-------	--------------

事業所紹介	閑静な住宅街の真ん中に位置する、認知症対応型デイ(定員10名)と一般デイ(定員30名)の2つのコースと機械浴と個浴の2つの浴槽を完備した、公設民営の通所介護施設です。利用者の良き隣人になることを目指し、利用者一人ひとりととの出会いを大切することをコンセプトに、運営に取り組んでいます。
-------	--

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

高次脳機能障害(大声や暴言といった社会的行動障害のある)の利用者を受け入れるに当たり、認知症と似た症状・障害がありながら、その対応方法が認知症とは異なることに、スタッフが戸惑いを感じ、その症状・障害に対し適切な対応ができないことが、他利用者に対してもストレスのない、穏やかな環境を提供することが困難になってしまった。利用者一人ひとりの症状・障害に寄り添う「個別性」という、認知症対応型デイの特性を活かしながら、どのようにその利用者に向き合い、どのように受け入れていくのが課題であった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

高次脳機能障害の利用者を受け入れるに当たり、その症状・障害を正しく理解し、現状の対応や状況が利用者本人にどのように影響し、その症状が顕著になるのかを検証することにより、その対応を変えることで、いかにその症状を改善することができるのかを本実践の目的とし、次の点を仮説とした。

1. 症状・障害を理解することにより、もう一度、利用者本人を知るきっかけになる。
2. 症状が顕著になる原因(対応、状況など)を、利用者が感じるストレスと捉えることにより、それを取り除く対応方法を確立する。
3. 「皆同じ」という考えはなくし、改めて「個別性」という意味を考え、認知症対応型デイとして、これまでのノウハウを活かす。

《3. 具体的な取り組みの内容》

・受け入れ～1ヶ月

スタッフミーティングを通じて、正しい知識を身に着けるために情報交換を行った。

・1ヶ月～3ヶ月

症状が顕著に出る対応や場面の振り返りを行い、利用者本人が何にストレスを感じているのかの意見交換を行い、それをもとに自宅での様子やその時の対応方法など、より具体的に家族からの聞き取りを、口頭または連絡帳を通じて行い、事業所内での様子の違いなどを話し合った。

・3ヶ月～6ヶ月

ミーティングで得た知識や家族から知りえた情報をもとに、ストレスになっているであろうポイントを分析し、その症状に対する「リアクション」だった対応方法を、スタッフの方から行動を起こす「アクション」へと対応方法を変更する。

・6ヶ月～1年

様子を観察し、変化の見られた点、変化の見られなかった点などを分析し、良い変化が見られた点については、スタッフ間で共有し、スタッフ全員が同じ対応ができるよう継続していく。

《4. 取り組みの結果》

症状が顕著になる対応や状況等の分析をすることにより、利用者のストレスポイントを割出、その症状を改善するには至らないまでも、緩和することはできたと思われる。

《5. 考察、まとめ》

対応方法の検討、分析、実施、評価を繰り返し行うことで、ストレスポイントを明確化し、その症状を緩和することができたと感じられた。本実践のきっかけは、高次脳機能障害の利用者を受け入れるということであったが、認知症の利用者のケアにも通じるものがあると思われる。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

介護者も知っておきたい高次脳機能障害の基礎知識（認知症オンライン）

<http://ninntisho-online.com/archives/16065>（2016年6月28日閲覧）

高次脳機能障害の症状・対処方法（All About 健康・医療）

<http://allabout.co.jp/gm/gc/37619>（2016年11月14日閲覧）

主な症状—高次脳機能障害 情報・支援センター（国立障害リハビリテーションセンター）

<http://www.rehab.go.jp/brain-fukyu/rikai/shoujou/>（2017年1月9日閲覧）

《8. 提案と発信》

高次脳機能障害の症状（記憶障害、社会的行動障害、遂行機能障害など）が顕著となる原因は不安というストレスなのではないだろうか。その利用者が何に対してストレスを感じているのか表情や声のトーン、または、その時の環境や状況などから探る必要がある。その結果、関わるスタッフが意見を出し合い、分析、評価し実践することを積み重ね、アプローチの方法を変えていくことで、例えその症状の改善には至らなくとも、より良い対応方法を生み出し、症状を緩和することはできると思われる。それは認知症ケアの場合であっても、同じことがいえるのではないだろうか。